

January 4, 2026

博士たちの礼拝

マタイ 2:9-11

2:9 博士たちは、王の言ったことを聞いて出て行った。すると見よ。かつて昇るのを見たあの星が、彼らの先に立って進み、ついに幼子のいるところまで来て、その上にとどまった。

2:10 その星を見て、彼らはこの上もなく喜んだ。

2:11 それから家に入り、母マリアとともにいる幼子を見、ひれ伏して礼拝した。そして宝の箱を開けて、黄金、乳香、没薬を贈り物として献げた。

「クリスマス・ページェント」では、羊飼いたちと東方の博士たちとがいっしょに、飼葉桶のイエスを礼拝する光景が演じられます。けれども、博士たちがイエスを礼拝したのは、イエスがお生まれになってから、1年ほどたった後だろうと思われまます。それで、東方の博士たちの礼拝は、クリスマスが終わってから、1月6日に祝われる「エピファニー」という祝日となりました。「エピファニー」とは、「栄光の現れ」という意味の言葉で、イエスが全世界の王として、また、すべての人の救い主としてその栄光を現されたことを指します。日本語では「公現日」で、レント（受難節）が始まるまでの期間は、「公現節」といって、イエスの生涯をたどる期間となっています。

一、すべての人の救い主

このように、「クリスマス」と「エピファニー」とは、連続していますが、別の祝日です。羊飼いたちと博士たちとは、同じ日にイエスを礼拝したわけではありませんが、多くの人は羊飼いと博士たちが同時に礼拝する姿を描いています。それには、

理由があり、意味があります。それは、羊飼いがイスラエルの人々を代表し、博士たちが異邦人を代表するものとして描き、イエスがイスラエルと異邦人、つまり、すべての人の救い主であることを言い表しているのです。

当時、イスラエルの人々と、異邦人と呼ばれた、それ以外の人々との間には厳格な区別がありました。唯一の神を信じ、律法を持つイスラエルの人々は、多くの神々を持ち、偶像を拝み、律法を知らない異邦人から遠ざかるだけでなく、異邦人を蔑み、憎みさえしていました。救いはイスラエルのためのものであって、異邦人はみな、審判のもとにあると考えていたのです。

しかし、それは本当ではありませんでした。すべての人を愛される神は、イスラエルだけでなく、異邦人をも救ってくださるのです。イスラエルは、自分たちは選民なのだから異邦人が自分たちに仕えるべきだと考えましたが、じつは、イスラエルが選ばれたのは、異邦人に仕え、まことの神を示し、神の愛と救いを伝えるためだったのです。仕えるために選ばれたのに、支配するために選ばれたと考え、イスラエルはその使命を果たしませんでした。そこで神は御子を人々に仕える「まことのイスラエル」として、世に送られました。イエスは、仕えられるためではなく、仕えるために世に来られ、すべての人に仕え、全人類のためにその命さえも差し出されました。それによって、イスラエルと異邦人との間の壁は取り除かれました。

羊飼いと博士たちを比べると、そこには、イスラエルと異邦人という宗教的なものだけでなく、社会的な身分や立場の違いもあります。羊飼いは、ユダヤではなくてならない仕事であり、イスラエルの王や指導者たちは「牧者」と呼ばれ、「主は

私の羊飼い」（詩篇 23:1）とあるように神も「羊飼い」と呼ばれています。けれども、実際の羊飼いたちの社会的地位は低く、彼らは貧しい生活をしていました。しかし、神が御子の誕生を真っ先に知らせたのは、そうした羊飼いたちにだったのです。神は、貧しい人、社会的に弱い立場にある人を常に心にかけておられます。人から忘れられても、神に忘れられる人は誰もいないのです。

同じように、神は身分や地位のある人たちをも覚えてくださり、御子への礼拝に招いておられます。使徒パウロはこう言っています。「私は、ギリシア人にも未開の人にも、知識のある人にも知識のない人にも、負い目のある者です。ですから私としては、ローマにいるあなたがたにも、ぜひ福音を伝えたいのです。私は福音を恥としません。福音は、ユダヤ人をはじめギリシア人にも、信じるすべての人に救いをもたらす神の力です。」（ローマ 1:14-16）「ギリシア人にも未開の人にも」というのは、そのあとで「知識のある人にも知識のない人にも」と言い換えられているように、博士たちのような知識人であっても、羊飼いたちのような一般の人であっても、イエス・キリストは、それらすべての人の救い主である。誰であってもイエス・キリストによって救われる。その救いを伝える福音は、民族の違い、貧富の差、学問の有る無しなど関係なく、すべての人に聞かせる必要がある。それがローマ 1:14-16 で言われていることなのです。

イエスがすべての人の救い主であるなら、「私の」救い主であるはずです。「イエスさま、あなたは私の救い主として世に来てくださいました」と申し上げ、このお方を心にお迎えし、この年の一日一日をイエスとともに歩みたいと思います。

二、全世界の王

さて、「博士」を「占星術の学者」と訳している聖書（新共同訳）もありますが、彼らは決して怪しげな人たちではなく、現代でいえば「天文学者」のような人たちでした。

天文学は古代からずいぶん発達していて、星の動きを観測して、地上での季節の移り変わり、気象の予測などがなされていました。また、それに基づいて暦が作られました。どの国でも暦を作るのは国王の特権で、人々は統治者が定めた暦に従って農作や牧畜などの仕事をし、生活をしなければなりません。ですから、ほとんどの国では天文学者は王に直接仕える身分の高い人たちだったのです。

博士たちは、不思議な動きをする星を発見したとき、それが、「ユダヤ人の王」の誕生を告げるものであることを知りました。しかも、その王は、ローマ皇帝や、当時ユダヤの王であったヘロデにまさる王であり、やがて全世界の王となるお方であることを悟りました。国王に仕える彼らが、そんな大事なことを国王に告げないはずがありません。また、王の許しがなければ、はるばるユダヤにまで行くこともできません。

博士たちは「黄金」、「乳香」、「没薬」をイエスに献げましたが、これらはとても高価なもので、一般の人にするような贈り物ではありません。王に捧げる贈り物です。さらに、このような高価なものを捧げることができるのも、一国の王であったと思われます。博士たちがイエスに捧げた贈り物は、王から預かったもので、博士たちは王の名代としてユダヤに向かったのかもしれませんが。そうなら、博士たちを遣わした王もまた、全世界の王が来られることを待ち望んでいた人だったのでしょうか。「君子は君子を識る」という言葉があるように、星が告げ

たユダヤの王が世界の王となるべきお方だと悟り、それにふさわしい贈り物を博士たちに託したと思われます。

詩篇 65:5 に「私たちの救いの神よ。／あなたは恐るべきみわざで／義のうちに答えられます。／あなたは 地のすべての果て／遠い大海の信賴の的ですよ」とあります。イエスは全世界のすべての人々が求め、慕い、あがめるお方としてお生まれになるとの預言です。イエスはすべての人を愛されたゆえに、すべての人から愛され、慕われ、あがめられる全世界の主であり、王なのです。

三、求める者の神

イエスは「すべての人の救い主」、「全世界の王」であることを学びました。最後に、イエスは「求める者の神」、ご自分を求める者にご自身を現し、ご自分のもとへと導いてくださる方であることを学んでおきましょう。

博士たちは、遠い東の国からはるばるユダヤの国まで旅行しました。当時の旅行は、今のように安全なものではありません。どこでどんな災害にあわないともかぎりませんし、風土が違えば病気になることもあります。行く先々に宿屋があるわけではありませんから、野宿をすることもありました。博士たちは「黄金」、「乳香」、「没薬」などの財宝を持っていましたから、いつ強盗に襲われないともかぎりません。博士たちの旅は、苦勞の多いもの、「命がけ」の旅でした。しかし、彼らの心には、救い主なる王にお会いしたたいという切実な願いと求めがありました。それで神は、彼らの求めに答え、彼らを守り、御子のもとへと導かれたのです。

博士たちを導いたのは星と御言葉でした。民数記 24:17 にこ

うあります。「私には彼が見える。しかし今のことではない。私は彼を見つめる。しかし近くのことではない。ヤコブから一つの星が進み出る。イスラエルから一本の杖が起こり、モアブのこめかみを、すべてのセツの子らの脳天を打ち砕く。」博士たちは、観測した星が、この預言が語っているものだと確信し、ユダヤへと向かったのです。

救い主、新しい王が生まれるとすれば、ユダヤの国の都、エルサレムに違いないと考え、まずエルサレムにやってきました。ところが、エルサレムの人には誰一人、新しい王の事を知りません。そのうち博士たちのことがヘロデ王の耳に入りました。ヘロデは学者たちに聖書を調べさせ、救い主は「ベツレヘム」で生まれることを知り、そのことを博士たちに教えました。博士たちは、星の光に導かれてエルサレムまでやってきましたが、エルサレムに着いてからは、星の光だけでなく、聖書の光、預言の光によって、ベツレヘムを目指しました。

「星の光」は、自然の光を意味します。確かに、自然界は神の栄光を物語ります。また、歴史も神の導きを教えます。しかし、それらには限界があります。人間の知恵や知識も、ある程度までは真理を教えるのですが、究極的な真理に導くことはできません。救い主を見出すには、自然界や人間の社会にある光だけでなく、神のことば、聖書の光が必要なのです。「あなたのみことばは、私の足のともしび、私の道の光です。」（詩篇119:105）とある通りです。

けれども、御言葉に導かれるためには、ただ御言葉を知っているだけでは不十分です。エルサレムの学者たちは聖書を知っていて、救い主がベツレヘムで生まれることを言い当てました。しかし、彼らは決してベツレヘムに行きませんでした。へ

ロデは、口では「私も行って拝むから」と言いましたが、実際は、博士たちがベツレヘムから帰ってきたら、その男の子のいる場所を聞き出して殺してしまうつもりだったのです。御言葉に導かれるには、博士たちのように、キリストにお会いしたい、会って礼拝したいと願い求める心が必要なのです。私たちも、求める心をもって御言葉が私たちの行く道を照らしてくれることを心から祈り願いたいと思います。

マリアは出産ののち、おそらく、ヨセフの親族の家で暮らしたでしょうから、博士たちがイエスに会ったのは王宮とは程遠い一般の民家で、イエスもごく普通の男の子に見えたでしょう。しかし、博士たちはその小さな男の子に輝く神の栄光を見ました。そして、救い主である王を礼拝するという目的を果たし、心を満たされて帰国していきました。

マタイの福音書には40回以上、「見よ」という言葉が使われています。博士たちの礼拝の箇所には、1節の「見よ、東の方から博士たちがエルサレムにやって来て…」と、9節の「すると見よ。かつて昇るのを見たあの星が…」というところで使われています。「見よ」と言われても、それを肉眼で見えることはできません。それでも「見よ」とあるのは、その状況を思い浮かべなさい。それが、何を意味しているのか考えなさい。信仰の目で見なさいということなのです。博士たちは確かに星を見ました。しかし、たんに肉眼だけで見たのではなく、その星の意味を探り、エルサレムまで来ました。その星は、ベツレヘムで再び現れ、博士たちはそれが明るく輝くのを見ました。そして、幼な子イエスのうちにある、星の光にまさるキリストの栄光を、信仰の目で見たとのです。

聖書に、「私たちは見えるものではなく、見えないものに

目を留めます。見えるものは一時的であり、見えないものは永遠に続くからです」(コリント第二 4:18)とあります。移りゆくものではなく変わらないものに目をとめ、表面に見えるものではなく、その背後にある神のみこころを見つめて、私たちも神と主イエス・キリストを求め続ける信仰の旅を続けたいと思います。その時、私たちはイエスのうちにある神の栄光を見ましょう。神は、求める者に見出されるのです。

(祈り)

父なる神さま、星の光で博士たちを救い主へと導いてくださったように、この年も、私たちを御言葉の光で、私たちの救い主であり、主であるイエスのもとに導いてください。博士たちが味わった、救い主を礼拝する喜びで私たちを満たしてください。イエスを私たちの人生の主とし、この方に仕えて、感謝のうちに生きる日々をお与えください。主イエス・キリストのお名前です。